して兵器に利用した最古の記載は、北宋・曾公亮ら奉勅撰の『武経総要』（一〇四五年成）で、「火薬」の語も同書から使われ始めたものである。『武経総要』には三種の火薬の製法が記されているが、これら北宋軍の使用した火器は紙や竹で包まれた火毬が激燃するにすぎなかった。

金軍は北宋軍の火毬に改良を加え、鉄製の壺に封じた「鉄火砲」や、さらに爆発性を強力にした破裂・焼夷弾の「震天雷」、或いは火焔放射器というべき「飛火槍」などを開発していった。蒙古軍や元軍もこれに類した火砲をさかんに使用した。元寇、文永の役（一二七四年）の際、博多で元軍が用い、「てつはう（鉄砲）」と称された火器もその類である。

次に火薬はそれ自体が爆裂する火器から、弾丸を飛ばす発射薬としての機能が注目され、より重要な意味をもつようになる。発射火薬の原始は南宋一二五九年に作られた「突火槍」で、巨竹の中に子窠（散弾）を入れ、轟音とともに発出するものであったが、発射火薬を用いた本格的な金属製火砲は元後期に登場した。

火薬は蒙古のヨーロッパ遠征によって西伝し、改良され、西洋の近代化を促した。日本へは西洋経由以前に中国から火薬が伝えられていたが、天文十二年（一五四三）頃、ポルトガル人によって種子島銃が伝来し、急速に普及した。黒色火薬は硝石が七割五分、残りを硫黄・木炭で等分に配合するのが最強とされた。

（平成十二年五月例会）

## ＊＊＊紹　介＊＊＊

片桐　一男　著

### 『江戸の蘭方医学事始　阿蘭陀通詞吉雄幸左衛門耕牛』

日蘭交流四百周年の昨年、片桐一男氏が慶祝の気持を込めて刊行された著書のうちの一冊が本書である。オランダ通詞の研究に長年たずさわってこられた青山学院大学文学部教授の著者が、その副題に見るように、持駒の一つである吉雄幸左衛門耕牛について、蘊蓄を傾けておられる。

その内容は、吉宗の世に長崎で生まれた吉雄幸左衛門耕牛を大きな縦の柱として、それと交叉する人物、事件、物等を横軸に、それらを互いにからませながら、長年のご研究を披露され、興味深い展開をくり広げると共に、そこから見えてくることをまとめとしてしめ括っておられる。その語り口は分かり易く、かつ謎解きのような展開に誘われて、読者は引き込まれるように読み進んでいくという運びである。これは著者が、史実に対して常に多くの疑問を抱きつつ、それらを長年温めながら、多くの資料や研究から丹念に解決していく方法をとっておられることと、無関係ではないと思う。

本書は大きく分けて、吉雄幸左衛門耕牛の生い立ちとその家系、ツュンベリーから教授されたスウィーテン水の普及と

定着、『因液発備』と『五液診法』の発刊とその背景に見えてくること、オランダ座敷とオランダ正月、の4テーマと、通詞の職務、吉雄家学の秘条と蔵書、流布している訳書、誤訳事件等の小テーマがあり、最後にまとめ、見えてきたことと略年譜が付加されている。

祖父吉雄寿山は医術を業とし、通詞家より養子にきた父藤三郎はオランダ通詞で、医を職とする叔父の身近にいて、幼少よりオランダ語に親しんだ吉雄幸左衛門が、通詞職のかたわら医術を修めて医家としても名をなしたということが、本書を読んで理解できるように思える。

今でいう臨床検査に関する本、ボイセンの『プラクテーキ』の訳書、『因液発備』と『五液診法』の発刊は、文化十二年（一八一五）と十三年（一八一六）であり、同一内容の訳書が、異なった書名で長崎系の門弟と、江戸系の門弟によって出版されたことについて、未詳であったいくつかのことを解明しておられる。すなわち、その活用を渇望されたボイセンの『プラクテーキ』は、長崎では吉雄が家塾で訳読・口授したが、秘条、相伝を方針とする耕牛は公刊の意図はなかった。一方、江戸では前野良沢も注目、訳読、門下生にすすめたが公刊は念頭になかった。だがその門弟たちには公刊を望む動きが広がっており、こうした江戸の動きは長崎にも伝わっていた。そして吉雄と前野の没後に公刊運動が実行に移されたというものであり、本書ではさらに複雑なからみ合いが伝えられていて、まさに著者のいう手に汗を握るような展開という所であろうか。医療界に身を置いてきた者にとっては、訳書の内容がどんなものであったのか、興味をそそられるものがあるがその記述はわずかである。そして吉雄の秘条故に存命中に一冊の医訳書の公刊も許されなかったということが、案外、処方公開につながる医薬分業が日本で進展しなかったルーツかなどと、はしたなく思ったりしている。

評者の論文から多くを引用して頂いているスウィーテン水については、ツュンベリーから教授された吉雄を通してその門弟へと広く普及、定着している様子が、個々の資料をもとに述べられており、ファン・スウィーテン水を研究テーマの一つにしている評者には興味しんしんたるものがある。いくつかの疑問もあり、それは今後の研究によらざるを得ないが、唯、まとめ15（二一二頁）にも記されている「…スウィーテン水は吉雄・杉田系統の蘭方医師たちにとって、それぞれの地におけるいわば「ドル箱」であったことがわかる…」という結論には、そうかもしれないが、話が出来過ぎているという印象を受ける。一例として、一九七六年に評者がスウェーデンで入手したスウェーデン・リンネ協会誌VI号（一九三二）に、元カロリンスカ医科大学性病科教授アルムクヴィスト氏は「医師リンネの業績についての研究――梅毒史への貢献」という論文で、リンネはオランダ留学から帰国して開業、約3ヵ月後には大いに繁盛したが、それは性病治療に成功したのが大きな理由であるとして、その解明のために当時の梅毒治療とリンネが使用した駆梅剤について詳細に調査し、その結果を

記しておられる。結論は繁盛の理由は分からないとしているし、その後ウプサラ大学教授となったリンネの講義録や手紙からファン・スウィーテン水を使用したことはあるが、後には他の治療法も行なっているとしていることもあり、評者には大いに疑問がある。（因みに、評者は一九七八年にこの論文からツュンベリーとファン・スウィーテン水を結びつけるヒントを得た。その後ようやくファン・スウィーテン水の処方を入手して、吉雄の『紅毛秘事記』中の処方との数値の一致を検証し一九九三年に発表、これを柱にした論文で一九九五年に学位を得た）。

オランダ座敷とオランダ正月については、そこを訪れた人々の印象記や料理の献立を紹介し、この献立を再現した現代の史的再現オランダ正月にも及んで、味わい深い内容となっている。

最後にウプサラへ行ったが見られなかったということがないように、ツュンベリー蒐集の植物標本類は公開（四七頁）されていないことを付記する。事前のアポイントメントと見たい標本類を学名で提示することが必要。

（高橋　文）

〔丸善株式会社　東京都中央区日本橋二―三―十、電話〇三―三二七二―〇五二一、二〇〇〇年一月二十日、新書判、二四四頁、本体七八〇円〕

## 横田　敏勝　著
## 『名画の医学』

『名画の医学』は、そのユニークな内容で読者を楽しませるし、同時に非常にためになる書物である。結論的にその理由を三つ挙げておこう。

一、名画、とくにその人物像を観賞するのに、医学的視点というものがあることを教えてくれる。

二、医学史の知識が豊富になる。

三、現代的な医学上の課題について、最新の研究成果を学ぶことができる。

著者の横田敏勝名誉教授は神経生理学者である。国際疼痛学会副会長を六年もつとめられた経歴がしめすように、その専門領域は痛みである。痛みは臨床的な問題でもあるからであろうが、著者の臨床医学の知識と理解は、平均的な基礎医学者のレベルをはるかに上まわるものである。とくに、免疫学、分子生物学、遺伝学などの知見を、縦横にくみ入れた解説を読まれるならば、神経生理学者がよくぞここまでと、読者は驚かれるにちがいない。

著者から読者への呼びかけのことばは、「名画を楽しみながら医学を学ぼう」である。まさにそれを可能とするものを著者は提供してくれている。

まず第一部は、日本の『病草紙』（十二世紀後半）より九点を選び、仏教的概念における三苦（老病死）のひとつである「病」